鎧橋随想

愛犬

岡地　常務　山内　広司

「畳と女房は……」といいますが、苦楽を共にした妻とは早いものでもう30年になる。

一人息子は自立し、最近の2人の会話と言えば、専ら愛犬「虎太郎（柴犬）」のことばかりだ。

彼が我が家に来たのは、2002年の9月と、まだ間もないのだが、生後1年半にして既に我が家の主役である。

最近はテレビコマーシャル等で話題を集める動物が増えてきておりますが、ともすれば会話が減りがちな2人にとって、かけがえの無い存在になっております。

さて、仕事上では、手数料完全自由化のカウントダウンが始まり、今後様々な困難が待ち受けていることだろう。

そうした中で、当然ストレスも増え、彼に癒される場面も増えるであろう。

しかしながら、彼のように小さくとも、会社にとって、ひいては当業界にとって、欠かすことのできない存在に私自身もならねばと強く胸に刻み、研鑽に励みたい。

言葉を交わすことはできないが、彼から学ぶことは多い。

より一層、公私の充実を図るためにも、彼には今後とも良きパートナーとして、元気に育ってもらいたい。

古き良き精神

三晃商事　常務　松本　隆満

年初めの諸行事が一段落した頃に、ふと「年々正月が短くなったなぁ」と感じる事がある。昔は正月と言えば、凛とした空気が漂い、身の締まる思いがしたが、それも随分薄れたようである。

正月を故郷で過ごしていた頃は、師走の声を聞くと、日曜日ともなれば、朝早くから年末年始の準備を始め、冬休みという声と共に、大掃除やら餅つきと慌ただしい年の瀬を過ごしていたものである。

このように、以前は年の区切りがハッキリしていたものだが、今日の都会では、日本独自の年末光景も殆どなくなり、年が明けてみれば、年始参りよりも先にスーパーの初売りに列をなす、という具合である。

昨年「ラストサムライ」と言う映画が人気を博した。時の流れにさらされながら、なおも語り継がれる日本人の古き良き『武士道』。幾多のハンディを背負いながらも、自分の美学を通して『男の生き方』が観衆の感動を呼んだ。そしてハリウッドの映画人は、「俺達にはない精神世界がある」と感銘を受けたそうである。この映画が日本において人気を博したのは、現代の日本人が自分達自身に今、何かが欠けている事に気づいたからなのだろうか。

雪

日本交易　常務　田浦　實

東京がうっすらと雪化粧になった日、今から33年前の12月、生まれて初めて雪を見た時の事を思い出しました。

私が生まれたのは鹿児島県の沖永良部島です。今でこそ、島歌や花の島ということで多少は知られるようになりましたが、当時は何の特徴もない南の島でした。

当然、雪なんて見たこともないし、触れた事もありません。「空から白いものが落ちてくる」、「フワ～、フワ～」、「シンシン」というような表現でものの本には書いてあるが、実感がないからそれだけの意識しかありませんでした。

ところが大学受験で博多に着いて、翌日目がさめたらあたり一面銀世界。とにかくびっくり。同行した父ももちろん雪は初めて。雪は相変わらず降り続いており、物音一つしない。

父も私も、寒さも物も言うのも忘れて、窓をいっぱいに開け、時間を忘れて見入っていた事を思い出します。今でも雪景色は当時とオーバーラップして大好きです。

田舎で過ごした時間よりも東京の方が長くなりましたが、あの時の雪の「感動」は今でも私の「感動」の原風景になっています。

故郷信州のこと

フジフューチャーズ　取締役　大井　康弘

信州には近年県歌に制定された「信濃の国」という歌があります。郷土を讃えて「信濃の国は十州に……」と歌うのです。明治の頃に師範学校で歌われ、その時の学生が教師として県下に散り、学校で教え、歌い継がれたのだそうです。

教育県の礎は師範から、今は信州大学教育学部に継がれ、学び舎の付属は、教育実習の教場でもありました。実習の終わりに教生たちは「先生と呼ばれた嬉しさは一生忘れない」と言い、よく泣いたものでした。

私は高校を卒業して上京する時、善光寺界隈の高殿で善光寺平を一望しながら、当時は遠い東京に思いを馳せ、母に見送られて信州を後にしたのでした。大学に入り、そして社会人となり、たまに帰省する列車では、いつも胸がキュンと痛んだものでした。早く母を楽にと思いつつ、それが果たせない自責の念でした。母を亡くして人目も憚らず涙しながら帰った信越本線でした。

唱歌「故郷」は北信濃の山里で生まれました。歌詞の「志を果たして、いつの日にか帰らん」と口ずさみつつ、はや40年が過ぎようとしています。信州の事は幾つになっても母を想うことにつながるのです。

振り返れば

太陽ゼネラル　取締役　山本　実

今まで考えても見なかった自身の自由について、この機会を借りて、これまでの人生を振り返ってみました。

10代、20代……現在の60代と歳を重ねてきましたが、それぞれの年代に関わった人達（仲間・組織）、尊敬もし教えられ、師と仰いだ人達。昔の写真をみつめながら、社会人になってから現在の職責になるまでの事を懐かしく想い出しました。

学生時代の友人に電話し、青春時代の話に笑い語り合い、お互いの近況を報告し合いました。

この事が友人の家族も交え、「ゆっくり人生を語ろうよ」の会を作るきっかけともなり、私自身も無邪気になり、家族からも「お父さんが良く笑っている。友達とよく電話をしている」との声、娘からも何か良い事があったのかと聞かれるほどになりました。

人生の中で本当に大切なもの、必要な支えとは、真の友人であり、職場の仲間達である事も今まで以上に感じました。人生を振り返る時間は、私の人生にとって楽しい時間でもあり、本当の自由な一時であったように思います。今、私に与えられた責任・使命を果たす事こそ、それをやり遂げた時もまた自由を感じる大切な時間であると思います。

湘南の山歩き

関東砂糖　常勤監査役　越石　陽之助

新春に山歩きを楽しんだ。わが家から1時間足らずで行ける標高150mそこそこの円海山や鎌倉アルプスである。山と呼ぶより丘の方が相応ながら一歩踏み込むと別世界の自然が楽しめる。

円海山の自然公園から建長寺を目指すと、間もなく天園峠（俗に六国峠）に至る。峠の茶屋のひらめく旗につい誘われ、床几に坐り、名物のおでんと缶ビールを飲みながら、相模湾を眺望し一息つく。天園ハイキングコース（鎌倉アルプス）に向かい、鎌倉カントリー横を抜け、2kmほど歩くと勝上嶽である。ここから一気に下ると建長寺裏手の大天狗、烏天狗の像が林立する半僧坊に到着する。この3時間少々の道程で、いい汗をかくことができた。

建長寺を拝観し、足を延ばし鶴岡八幡宮境内の冬ぼたん展を鑑賞、ぼたんの苗木一鉢を求め、妻へ小川軒のレーズンサンドを土産に買い帰路につく。

ある先輩が呆け防止と老化対策に次の5つを実行すべしと教えてくれた。「1日1回高笑い。10人と話す。100回の深呼吸。1、000文字書く。10、000歩歩く」。自然を求め、史跡を尋ねて、これらかもウォーキングを楽しみたい。

拝見　クロスワードパズル

達成感に引かれて

豊商事会長　多々良　義成

多々良さんは業界でも屈指のゴルフの達人として知られる。今は名門武蔵カントリークラブの社長でもある。その多々良さんが難解で有名な超特大の漢字ナンクロのクロスワードパズルに嵌ったのは2年ほど前のことだ。

もともとパズルは好きなほうで、週刊誌などのパズル欄は暇つぶしに格好のネタであった。それがある時からパズル専門の週刊誌を購読するようになる。暇を見付けてはいつでもどこでも謎解きに挑戦する。

得意は漢字パズル。空欄に漢字を当て嵌めながら、熟語や慣用句に仕上げていくわけだが、超特大版になると、埋める欄が1、000もあって使用漢字が200字を超す。気の遠くなるような作業だが、多々良さんはそのほとんどを解読してしまう。

「どうしても解けない時は、しばらく冷却期間を置いて、再チャレンジということになります。漢字パズルをやっていて、意外な言葉を発見することがあります。『花四天』てご存知？」。

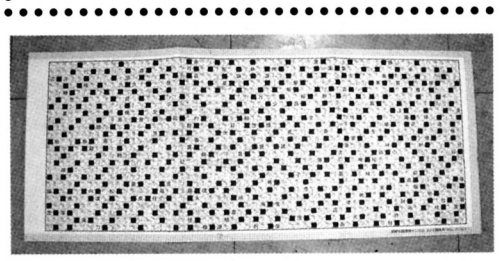
慌てて『広辞苑』や『大辞林』を引いてみたが出てこない。歌舞伎の世界で使われる言葉らしい。

多々良さんはパズルを解いて賞金稼ぎをするつもりはない。頭の体操であり、正解を得た時の達成感が心身をリフレッシュしてくれるのだろう。パズルに段位はないが、漢字の部では「自称5段」。

時にはパズルの問題作成にも挑戦するが、こちらは解題以上に難問らしい。

多々良さんのパズル好きのルーツを辿っていくと、手当たり次第に本を読み漁った島根県川本町の少年時代に遡る。「山間の田舎町で5球スーパー（ラジオ）では雑音が入ってよく聞き取れないので、本ばかり読んでいました。そのせいでしょうか、今も本はよく読みます。深夜に目が覚めると本を開いていますね」。

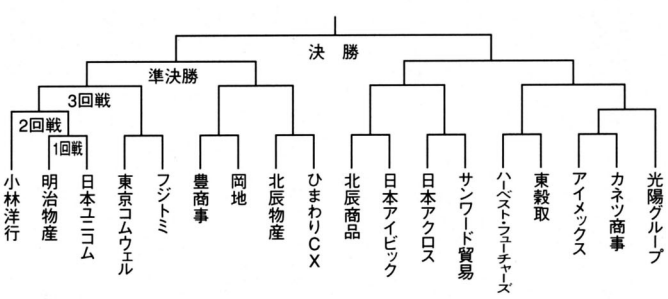
根っからの活字人間である多々良さんは、これからもゴルフと読書の傍ら、漢字パズルに向かい合い、出題者との見えざる格闘に精魂を注ぐ。



▲漢字パズルに今日も挑戦

第13回商品取引員親睦野球大会トーナメント表

4月10日に始まる商取親睦野球大会（参加18チーム）の組み合わせが以下の通り決まった。東穀取は初参加。



事務局だより

先日の新聞記事で、ある電線メーカーの社長さんが「銅の仕入れ値が上昇している。しかし、製品の値上げをユーザーに認めてもらえる状況ではなく、自助努力の限界を超えている。このままでは倒産する業者が出る」という趣旨のことを話していました。

商品取引所分科会の中間報告では、商品先物市場の産業インフラとしての機能が今後ますます重要になってくると述べられています。

この社長さんや当該業界に限らず、製品への価格転嫁が容易にできない業界の企業が安定経営のためのツールとして利用しやすい商品先物市場を整備することは急務であるとあらためて感じた次第です。